みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

「梅棹忠夫著作集」全22巻解題：第11巻 知の技術

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-02-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 太田, 心平 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008961

第11巻

知の技術

＊知的生産の技術
＊『知的生産の技術』の前後
＊知的生産の展開　＊フィールドでの知の技術

梅棹忠夫はマルチな人物であった。梅棹が社会にあたえた影響は、民族学や比較文明論の分野だけで言い尽くせない。

なかでも、『知的生産の技術』は社会に広く影響を与えた。一九六五年から雑誌『図書』上に連載され、六九年にはじめて新書版にまとめられた『知的生産の技術』で梅棹は、特にB6判カードを使った情報の蓄積と、それを用いた発想の構築という「知の技術」を世に示した。これはたいへんな反響を呼び、研究者からビジネスマンまでがこの技術を真似した。

本書には、その『知的生産の技術』に加え、その後の反響や進展、探検や調査という「カード以前に必要な方法」や、写真という「カードとは別の方法」、そして実際にそうした技術を活かして作成されたマルチな文章の数かずが採録されている。

これらは一貫して、読む者のある意識を高めてくれる。人間の頭脳がもつ限界に挑戦する意識である。物事を忘れてしまうことを当然視するのではなく、発想の貧しさを嘆くでもなく、貪欲なまでに挑戦してみること。それが本書の精神である。

一九九〇年代後半以降、社会では情報のデジタル化とその個人利用が進んでいる。対して、梅棹がとった方法はあくまでアナログだが、ファイルを作り、ラベルを書き、フォルダに収納し、検索をかけ、そうした道具によって頭脳をフル稼働させるという精神は、こんにちのパソコンの基本的な性格（グラフィカル・ユーザー・インターフェイス）と驚くほど合致している。パソコンによる「知の技術」（デジタル・リテラシー）を周到に行うためにも、梅棹一流のアナログ・リテラシーから学ぶところは多い。

『知的生産の技術』は、初版から四〇年を経た現在も、変わらぬロング・セラーとなっている。人びとは、人間の頭脳がもつ限界に挑戦しようという意識を、いまも梅棹から学びつづけている。（太田心平）